

(58) 0106 自立しない日本人

101505 締め切り 091505 締め切り

第二次世界大戦直後に「自立」の檄を飛ばした南原繁

炉辺医話(57)「歴史は改竄される」(CE2005年12月号)に、立花隆が、いわゆる年配の日本人には、第二次世界大戦中は軍部と呼ばれるような1部の人たちばかりでなく当時の日本人の大部分が戦争をもり立てるような機運にあった、といている¹⁾と書きました。みんなが戦争に巻き込まれたのは、日本人は精神的に個人として自立していなかったからだとして、戦後、国民全体に自立を呼びかけたのは南原繁であったと、立花は文芸春秋2005年7月号に続けています²⁾。

1945年8月15日、天皇の玉音放送があって第二次世界大戦は終わりました。日本国民みんなが茫然自失の状態でした。そんな人たちの中であって、クールな頭で次々に何をな

すべきか、指針を出し続けたのが南原繁東大法学部長で、その後戦後初めての東大総長に選ばれたのも当然であったと、立花はいています。南原は、時の首相・吉田茂に「曲学阿世の徒」(変な学問で世の中を惑わせる奴)と呼ばれたことでわたしの記憶に残る人です。南原は、敗戦わずか2週間後に「大学新聞」に「戦後における大学の使命 - 復員学徒に告ぐ」という論文を書き、「。。。人ひとりひとりが自由なる精神的独立人になること。。。青年よ。学徒よ。希望を持て。理想を見失うな。かかる苦難の時代に戦い生きた祖先は未だかつて無かったと同時に、かかる栄光ある任務の課せられた時代もまたかつて無いのである」と檄を飛ばしたのです。

その後、南原総長の演説が1カ月に1度くらいの割合で安田講堂において行われたようなのですが、新聞は各紙ともほとんどその全文を載せて報道し、全国の学生・教育者・知識人などの感銘は大変なものであったとされ

ています。立花によると、南原がこのころ一貫して述べていたことは、戦争の最大の原因は、日本人全体が精神的に独立した存在になっていなかったことにある、ということでした。それで、日本人は誤れる指導者に盲従してしまった。何よりもまずなすべきことは、日本人ひとりひとりが精神的に独立した人間になることで、ヨーロッパの歴史においては人間をそのように精神的に自立した存在にさせたのはルネサンスと宗教改革であったといったそうです。戦時中は日本人のほとんどが、天皇を現人神と仰ぎ、国民全員が狂信的な、天皇教の信者になっていたとあっていいほどでしたから、「天皇の人間宣言」＝「日本の宗教改革」と考えられるといったそうです。

南原繁の精神的背景はキリスト教

さて、次は山折哲雄の南原繁に対する論評です³⁾。戦後日本の教育の行方に大きな舵を切った人であるといっています。南原の思想

的背景を探ってみると，第一高等学校に入り新渡戸稲造校長の思想的感化を受け，東京帝大法科大学政治学科に入学してからは内村鑑三の聖書講義に出席し，無教会派のクリスチャンとなる素地ができたといっています。

1946年には，貴族院議員として日本国憲法草案の審議に関与し，さらに教育刷新委員会委員となり，後にこれが中央教育審議会に発展して委員長になりました。戦後日本の教育に新たな路線が敷かれていく先頭に立ち，「教育基本法」を制定する大仕事に向かっていったのです。この時期南原が唱える教育理念は，戦後日本の精神的焦土に，「人間性の回復」（ルネサンス）と「神の再発見」（宗教改革）を達成しようということでした。目的とするところは，個人の自由と独立を目指すヒューマニズムの高揚であり，ヨーロッパ・モデルの導入であったといっています。わたしは，山折のいうヨーロッパ・モデルは，純粹にヨーロッパ・モデルを指しているというよりは

アメリカを含む広い意味の欧米モデルを意味したものと理解すべきと考えます。

自立しない日本人の背景は儒教

わたしは、この個人の自由と独立と対極にある「自立しない」日本人は、儒教的道徳意識を引きづっていると考えています。儒教では、「君臣・家（イエ）」関係を重視し、自立して行動することを抑制します。封建主義的社会規律として都合いい思想です。

一方では、1945年12月に連合軍総司令部から日本政府に対する指令として軍国主義と結びついた国家神道の解体と政教分離を推進する「神道指令」なるものが発布されています。時期的に同時進行していた憲法改正の草案には、すでに信教の自由と政教分離の問題が含まれていました。奇妙なことに、連合軍総司令官マッカーサーは、政教分離をいいながら、自らの道義的・精神的立場を支えるものとしてキリスト教の権威を持ち出してはばからな

かったといわれていることです。1945年の秋、戦後初めてプロテスタントの牧師が来訪したとき、マッカーサーは「日本は精神的な真空状態にあり、日本をキリスト教化しないならば日本は共産主義化される蓋然性が強い。そうならないように1000人ほどの宣教師を日本に送ってほしい」といったことが伝えられています。

わたしの記憶では、マッカーサーの国家神道の否定は日本国民の報復を恐れてだと、民間レベルでは噂していました。政教分離も、おかしい話です。アメリカは強大な宗教国家で、大統領選挙も宗派がらみ、議会での証言にも聖書に手を当てて宣誓します。マッカーサーのいう政教分離の宗教とは、儒教要素をもった神道のことだったと考えるべきでしょう。

日本人は精神的ショックに弱い？

わたしは、第二次世界大戦後の「茫然自失」

「精神的な空白」は、突然の精神的ショックに対する日本人に、かなり特有な反応なのではないかと疑っています。独立・自立して判断することができなくなるのではないのでしょうか。阪神大震災の直後には、今回のハリケーン・カトリナの後のニューオーリンズにおけるような略奪などが起きなかったのは、外国人にはむしろ不思議とする反応記事を読みました。わたしには、自制・規律正しいというよりは、茫然自失と見えました。略奪に進む方に、飽くなき生命への意欲・執着を感じます。

日本人の精神・思想構造の重層性

さて、第二次世界大戦後、変な言い方ですがアメリカの物質至上主義文明がキリスト教的思想を引き連れ、あるいは上に乗っかり滔々と日本に流れ込んできました。その結果、現代日本における思想の混乱、あるいは重層性構造が生まれてきたとわたしは考えていま

す。

これは、医療に関係する宗教的・倫理的側面に影響を及ぼしています⁴⁾。極めて定型的に言えば、表層は戦後の教育に乗ったキリスト教的であるが、深層は江戸・明治時代からの儒教化仏教的ということです。典型的な例は、移植医療に現われています。神の思し召しにしたがって臓器を提供することによって移植医療は成立するのですが、親から受けた身体をキズつけることを忌避する儒教的精神があるので移植は発展しないのです。

思えば、お上から与えられた宗教は根付かないというか、民衆はしたたかというべきなのか。。。聖徳太子は、仏教を国教と定めましたが、日本古来の神道は延々と受け継がれています。明治政府は、一方で国家神道化を進めながら廃仏毀釈をしようとしていました。現状を見る通り、なにやら修飾された民間信仰としての仏教は強いのです。盆・暮れ・正月には、精神は忘れられても、イベントとして

行事はしっかりと姿を現します。

参考文献

- 1) 立花隆：私の東大論 68 - 平賀東大戦争体制下の大繁栄 - 、文芸春秋 2005 年 6 月号、p388 - 401、文芸春秋社、東京、2005 年
- 2) 立花隆：私の東大論 69 - 南原繁総長と昭和天皇退位論 - 。文芸春秋 2005 年 7 月号 p394 - 407、文芸春秋社、東京、2005 年
- 3) 山折哲雄：南原繁 - 政教分離の日本パターン。さまよえる日本宗教、p36、中公叢書、中央公論新社、東京、2004 年
- 4) 阿岸鉄三：医療と宗教。炉辺医話 48 回 クリニカルエンジニアリング 16(3) : 268 - 270、2005 年

挿絵：美瑛の筋（スジ）描きの畑

美瑛の秋は、筋描きの風景です。タテタテ、ヨコヨコの色の筋が特徴的です。今人気のオーベルジュの部屋の窓から厚い雲を通して、夕焼けの空が覗いているのが見えました。